樟（くす）の緑

第18代校長　川内　時男

「合縁奇縁」は人と人のつながりに関して使われる言葉ですが、学校と教師の間にもこれはあるようです。昭和五二年の春、新任教員として教師人生をスタートしたのが立江中学校、それから三十有余年の後、定年退職を迎えた学校がまたもやここ立江中学校でした。そしてこの年の保護者の中には新任当時の教え子たちがたくさんいてくれて温かく学校を支えて下さったものです。振り返れば私と立江中学校の関係はまさに合縁奇縁と言うにふさわしいものでした。立江中学校区は昔から教育熱が高く、文武両道に秀で、久しく「県南の学習院」と呼ばれてきました。これは地域の伝統として今も脈々と受け継がれています。

私が新任だった昭和五十年頃と言えばすでに教育現場の荒れがマスコミをにぎわし、大きな社会問題となっていました。しかしそんな時代にあっても立江中学校の生徒は純朴で、竹のようにまっすぐで、保護者をはじめ校区住民の皆さんは極めて協力的でした。近年問題になっているモンスターペアレンツなどは全くその萌芽さえ見られませんでした。ということで教師にとって立江中学校はまさに地上の楽園だったのではないかと思います。そんな学校で教師人生の始めと終わりを過ごすことができた私は希に見る果報者だったといえましょう。このたび諸般の事情で立江中学校は輝かしい歴史の幕を閉じることになりました。自分が勤めていた学校がなくなるなどは教師としては誠に寂しい限りですが、これも歴史の一コマ、新しい学校が出来る慶事として受け止めるべきなのでしょう。

車の中から立江中学校の校舎を見ることが度々ありますが、その光景は昔とほとんど変わるところがなく、今も新任当時の懐かしいたたずまいを見せてくれています。とりわけ印象的なのはグランドにそびえ立つクスノキの勇姿です。校歌にも詠まれているので立中の象徴と言ってよいでしょう。学校には様々な樹木が植えられていますが、実は学校の植栽にはある特徴があります。その一つはクスノキ、松、イチョウ、アカシアなど、寿命が長く、大木になる樹木が多いことです。これは、卒業した子供が後年学校を訪ねてきた折、昔と変わらぬ景観が見られるように・・・という理由もありますが、そればかりではありません。これらの木には「慌てず急がず、ゆっくりと大きく成長してほしい」という大人の願いが込められているのです。そんな木の代表格がクスノキです。

徳島では金満家のことを分限者（ぶげんしゃ）と言いますが、これを木になぞらえて「クスノキ分限」とか「梅の木分限」などと呼ぶことがあります。「クスノキ分限」は長い年月苦労を重ねた末に大成した分限者、そして「梅の木分限」は「にわか成金」のことを指します。梅の木は成長が早く、植えた翌年にはもう花が咲き、数年もすれば実を成らせることから「にわか成金」の代名詞にされてしまいました。「松竹梅」の言葉があるように、梅は元々縁起がよく、庭木として重宝される花木ですが、学校の敷地に喜んで植えられる木ではないのです。一方クスノキは長い年月をかけて成長し、ゆっくりと大木になります。子供の大器晩成を願う学校にはまさにうってつけの木と言えましょう。

小松島教育界の新しい歴史を刻むことになる小松島南中学校がどのような校舎をもち、どんな植栽に囲まれるかは知りませんが、もし可能ならば教室からよく見える運動場の一角にクスノキの大木があってほしいと心密かに願っています。その木陰に若人達が集い、そして風雪に耐える雄々しきクスノキを眺めつつ勉学に勤しみ、凛とした小松島南中生が数多く育ってくれるよう願ってやみません。